

日本学術振興会 ストックホルム研究連絡センター
Japan Society for the Promotion of Science - JSPS Stockholm Office -



ストックホルムセンターだより 第 12 号



Contents

写真：メーラレン湖に浮かぶ、ストックホルム市庁舎

1. はじめに
2. ストックホルムセンターの行事・関連イベント
 - ・ 第7回コロキウム「ゲノム科学の最先端と医療への挑戦」の開催
 - ・ ノルウェー科学技術大学訪問及びセミナーへの参加
3. ニュース・トピックス
 - ・ 2006年ノーベル賞受賞者の発表について
 - ・ スウェーデンの新しい研究政策について
 - ・ ストックホルム大学主催 EU の研究資金に関するシンポジウム 報告
 - ・ シャルマーシュ工科大学の学生が京都大学原子炉実験所で実験研究
 - ・ ストックホルム・ウプサラの主要大学が新たな Website を立ち上げ
4. 北欧の学術機関の紹介
 - ・ The Swedish Research Council
5. JSPS Alumni Club in Sweden 会員インタビュー
 - ・ Dr. Enrico Savazzi 氏
 - ・ Prof. Mikael Lindgrens 氏

1. はじめに

ストックホルムだよりも今回で通算第 12 号（今年度第 2 号）の発行となりました。

今号からセンターだよりの内容をすぐに把握していただけるよう、見出しに **Contents** をつけてみました。皆様のご意見をいただきながら、今後もより親しみやすいセンターだよりの作成に努力したいと思いますので、引き続きご愛読いただきますようお願いいたします。（石沢）

2. スtockホルムセンターの行事・関連イベント

第7回コロッキウム「ゲノム科学の最先端と医療への挑戦」の開催 (2006.8.30 Stockholm)

8 月 30 日、今年度 2 回目（通算 7 回目）のコロッキウムとして、カロリンスカ研究所ノーベルフォーラムに於いて、「ゲノム科学の最先端と医療への挑戦」をテーマにしたコロッキウムを開催しました。

ゲノム解読計画の成果が広く生命科学に与えた影響は非常に大きく、本コロキウムではゲノムからプロテオーム、さらにシステムバイオロジーに至るポストゲノム研究の最先端と、疾患の基礎研究や医療応用を目指した研究を実践している若手研究者を日瑞両国から選抜し、討論や交流を通じて当該分野における両国間の研究交流を深めることを目的としました。



この目的を達成するため、日本側コーディネーターには、ヒト 22 番染色体及び 21 番染色体の解読に多大な貢献をされ、ヒトゲノム解読の第一人者として、世界トップレベルの研究者である、慶應義塾大学 清水信義教授をお迎えし、研究内容の関連性や広がり、大学の地理的バランスや多様性等を考慮しながら、DNA Chips, Genetic Disease, DNA Diagnosis, Gene Therapy などに関する研究を中心に推進されている日本人研究者 4 名をスピーカーとして選抜いただきました。またスウェーデン側のスピーカーについては、カロリンスカ研究所の Duke 研究部長に、日本側スピーカーとの発表内容のバランスや大学の地理的バランスなどを考慮した上で、新進気鋭の研究者 4 名を推薦していただきました。

また、今回のコロキウムでは、プレゼンテーションのみならず、より密接な研究交流を構築するため、新しい試みとして日本側スピーカーの研究室所属の若手研究者 4 名にもポスタープレゼンターとして参加いただきました。

なお、今回のスピーカー及びポスタープレゼンターは以下のとおりです。

【日本側】

- ・慶應義塾大学医学部・分子生物学教室
- ・大阪大学生命機能研究科
- ・慶應義塾大学医学部・分子生物学教室
- ・浜松医科大学光量子医学研究センター
- ・藤田保健衛生大学総合医科学研究所

- | | |
|------|---------------|
| 清水信義 | 教授（兼コーディネーター） |
| 八木 健 | 教授 |
| 浅川修一 | 専任講師 |
| 蓑島伸生 | 教授 |
| 池野正史 | 講師 |

【スウェーデン側】

- Department of Cell and Molecular Biology, Karolinska Institute,
Professor. Johan Ericson
- Department of Experimental Medical Science, Lund University,
Associate Professor, Angela Cenci Nilsson
- Department of Molecular Medicine and Surgery, Karolinska Institute,
Professor Anna Wedell
- Department of Genetics and Pathology, Uppsala University,
Associate Professor Mats Nilsson

【ポスターセッションプレゼンター兼ディスカッサント】

- | | |
|---------------------|--------------------|
| • 慶應義塾大学医学部・分子生物学教室 | 工藤 純 助教授 |
| • 慶應義塾大学医学部・分子生物学教室 | 高柳 淳 専任講師 |
| • 浜松医科大学光量子医学研究センター | 細野克博 科研費研究員 |
| • 藤田保健衛生大学総合医科学研究所 | 鈴木伸卓 助手 |

会場としては、優れた生理学・医学の講演会が多数行われているカロリンスカ研究所内のノーベルフォーラムを使用し、在スウェーデン日本大使である大塚大使をはじめ、当日は約 50 名ほどの参加者が集まりました。その中にはカロリンスカ研究所で研究に従事している日本の若手研究者の姿も数名見受けられました。

セッションでは、はじめに岡崎センター長及びカロリンスカ研究所副学長の Prof. Hans Forssberg より歓迎の挨拶が行われ、引き続き清水教授による **Introductory Remarks** を皮切りに、日本側及びスウェーデン側の研究者が交互にプレゼンテーションを行いました。日本側からは、ゲノム解読作業によって得た非常に膨大なデータベースを基に、それを医療へ応用しようとする挑戦的な各種研究の成果や近況などが紹介され、またスウェーデン側からは主に神経科学や幹細胞研究に関して、基礎研究に臨床的観点も加えた研究成果などが紹介されました。それぞれが大変特徴的であり、発表後の質疑応答では日瑞それぞれの研究者からお互いの研究内容について白熱した議論が交わされました。

また、セッション後に行われたポスターセッションでは、より詳しくその研究内容を紹介し、議論を行う場として有効であり、また若手研究者がこうした発表機会を得ることは、キャリアアップ形成のためにも非常に有意義な場であったといえます。所属研究室の協力に感謝いたします。



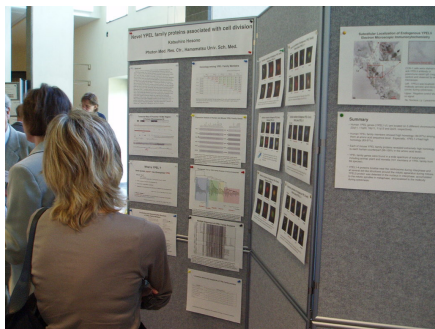
清水信義教授のプレゼンテーション



Dr. Anne Wedell のプレゼンテーション



会場の様子。参加者はひとつひとつの講義に集中して耳を傾けていた。

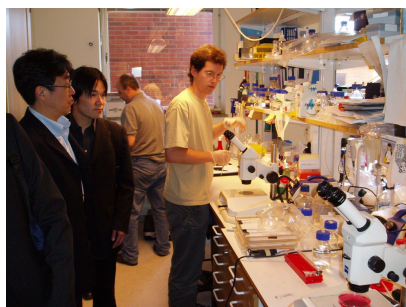


ポスターセッションの様子。質疑応答も活発に行われた。



さらに今回は、コロッキウム開催日前後にスウェーデン側スピーカーの所属するカロリンスカ研究所及びウプサラ大学内の研究室をそれぞれ訪問する機会を得ることができ、実際の研究現場での視察や議論を通じて交流を一層図ることができました。中には今後の研究者交流や共同研究に関する展望などについて具体的に話し合われる場面もあり、今回のコロッキウムを通じて当該分野における日瑞の研究交流がより組織的に発展する可能性も大いに期待できそうです。

(石沢)



研究室訪問及び打合せの様子。密接な研究交流が行われた。



コロッキウム終了後、ノーベルフォーラム前にて。

ノルウェー科学技術大学訪問及びセミナーへの参加 (2006.9.8 Trondheim, Norway)



ノルウェー科学技術大学 (NTNU) は、ノルウェーに 6 つある総合大学の 1 つで、建築装飾、工学、情報数理、芸術、自然科学、医学、社会科学の 7 つの学部を有しています。名前の由来についてインターナショナルオフィスで確認したところ、「トロンハイムにはかつてノルウェー工科大学など 3 つの高等教育機関があったが、事務の効率化のため、教育省の指導の下で合併して 1968 年にトロンハイム大学になった。しかし実態上は融合せず、そこで、1996 年に美

術学や人文科学も含める形で、**Norwegian University of Science and Technology(NTNU)**としてスタートした」とのことでした。その名前のとおり、工学、自然科学の分野で特に強みを発揮しており、工学分野などで学部課程を含め 5 年間で修士号を取れる工学コースなどの修了者は、同分野におけるノルウェーの大学修了者の約 8 割を占めています。

現在、戦略的に進める 6 つの主要なテーマとして、エネルギーと石油、医療技術、材料工学、海洋工学、情報通信技術、グローバル化を設定して、ポストドクターのための資金として年間 200 万～500 万ノルウェークローネ (約 3600 万～9000 万円) を配分しているとのこと。また、通信システム、記憶、海洋科学に関する 3 つの研究所が国から COE として指定されており、ノルウェーリサーチカウンシルなどから年間 9000 万ノルウェークローネ (約 16 億 2000 万円) 支援されています。

一方で、社会科学部の社会学・政治学科の日本プログラム長を務める Dr. Midford によると、同プログラムは 1998 年に設立され、例年志願者は 20 名程度であったが、昨年は 48 名にも上ったとのことでした。

トロンハイムでは 2002 年、日本紹介大型文化広報事業「JAPAN2002」の一貫として、NTNU において、海洋バイオ、エネルギーなどのセミナーが開催されるなど、日・ノルウェー交流が進められてきました。本年も、9 月 6 日～8 日にかけて、日本及びノルウェーの環境・エネルギー関わる材料・プロセス研究の現状、日本の経済改革に関する 2 つのシンポジウムが日本から研究者を招聘して開催されました。

後者のシンポジウムでは、京都大学法学研究科 鈴木基史教授が、「Asian Free Trade Initiative and Japanese Domestic Politics」と題して講演され、EC が自由域内の自由化に成功したのに対し、日本が EPA (経済連携協定) や FTA (自由貿易協定) を進めることができない現状のひとつとして、日本の政治における意思決定システムに問題があること等を明快に論じられました。

(大月)



日本の経済改革に関するシンポジウム



JSPS フェローシップ事業に関するプレゼンテーション

3. ニュース&トピックス

●2006 年ノーベル賞受賞者の発表について

10 月 2 日の生理学・医学賞の発表に始まり、13 日の平和賞の発表まで、ノーベル賞各賞の発表が行われました。各賞の発表日、発表機関及び受賞者については下記のとおりです。

発表日	賞名	発表機関	受賞者（国籍）敬称略
10 月 2 日（月）	医学・生理学賞	カロリンスカ研究所	Andrew Z. Fire（米国） Craig C. Mello（米国）
10 月 3 日（火）	物理学賞	スウェーデン王立科学アカデミー	John C. Mather（米国） George F. Smoot（米国）
10 月 4 日（水）	化学賞	スウェーデン王立科学アカデミー	Roger D. Kornberg（米国）
10 月 9 日（月）	経済学賞	スウェーデン王立科学アカデミー	Edmund S. Phelps（米国）
10 月 12 日（木）	文学賞	スウェーデンアカデミー	Orhan Pamuk（トルコ）
10 月 13 日（金）	平和賞	ノルウェー・ノーベル委員会	Muhammad Yunus 及び Grameen Bank （バングラデシュ）

（感想）

世界中から注目を集めるノーベル賞の発表会場に同席する機会を得ましたが、その穏やかな雰囲気により同賞の格調の高さを感じました。

医学・生理学賞の発表が行われたカロリンスカ研究所のノーベルフォーラムでは、発表 15 分前に会場に向かったところ、会場の中に一步も入ることができない程の人で溢れ返っていました。大学の敷地内ということもあって、学生の姿が多くみられました。しかし発表時には会場はどよめき一つ起こらず、静かに受賞者に関する資料が会場に配られていきました。

一方、物理学、化学、経済学の各賞の発表が行われたスウェーデン王立科学アカデミーでの発表では、報道関係者及び学術関係機関のメンバーなどが会場に集いましたが、スウェーデン国内のみならず、中国など海外メディアの姿もありました。また会見中には例年のように、受賞者へ直接電話を通しての質疑応答が行われました。会場の質問に対し受賞者は一様に冷静に回答していたものの、やはり今回の受賞に対する驚きは隠しきれない様子でした。「授賞式でお会いできるのを楽しみにしています。」と事務総長の締めくくりの挨拶に答える受賞者の声はとても晴れやかで、気持ちのよい雰囲気に会場が包まれました。



ノーベル化学賞発表時の様子(王立科学アカデミー)

12 月の授賞式で各受賞者がどのようなお話をしてくださるのか、今からとても楽しみです。
（中谷）

●スウェーデンの新しい研究政策について

スウェーデンでは9月17日に総選挙が行われ、穏健党、中央党、自由党、キリスト教民主党民主党の4党による中道右派連合が、社民党に左翼党、緑の党を加えた中道左派陣営を僅差で破り、10月6日に穏健党の党首レインフェルトを首相とする新内閣が発足しました。

また、教育研究大臣には、教育政策に力を入れている自由党の党首であるレイヨンボリが就任しましたが、報道されている新教育政策大臣の考えをお伝えしておきます。(大月)

- ・ 選挙ポスターでは"Finally! Nobel Prize to Sweden. Big investments in research gave results"(ノーベル賞がスウェーデンにきた。研究への大きな投資の結果だ)と掲げたが、スウェーデン人のノーベル賞の授賞を約束することはできない。しかし、研究への予算は大幅に増やす。2007年には2億6000万クローネ、2008年には3億クローネ、2009年には4億クローネにする(1クローネ=約16円)。
- ・ 大学が外部資金を獲得したときに課される税金を廃止する。
- ・ 国立大学の理事の一部が政治的に指名されている現状を改める。
- ・ 大学生が強制的に学生組合に加入しなければならない制度を廃止する。
- ・ デンマークのように、研究を促進するため様々なことを検討する政府の会議を創設する。労使の代表にも委員になってもらい、スウェーデンの手厚い雇用保障システムを改め、デンマークのように失業給付を高くすることを検討する。

10月16日 Svenska Dagbladet 参照

●ストックホルム大学主催 EUの研究資金に関するシンポジウム 報告

日本においても2007年から開始予定の欧州フレームワークプログラム(EP7)など欧州全体の研究政策に対して関心が寄せられておりますが、去る10月11日にストックホルム大学主催によりEUの研究資金に関するシンポジウムが開催されたところ、概要をお伝えしておきます。

シンポジウムのテーマは、スウェーデンにとってEUの研究資金はどのような恩恵があるか、ヨーロッパリサーチカウンシル(ERC)はどのように発展していくべきかということでした。産業界代表として出席したMr. Carl Bennetは、スウェーデンが米国やアジアと競争していくには、研究のための財団を創設する必要がある、選択と集中を進める必要があること、さらに、かつては欧州向けであった米国の研究資金は、アジアに向かっており、EU内の新たな資金は、研究の質の維持及び向上に重要な役割を果たすと述べました。

一方、ERCの創設に関わっているProf. Carl-Henrik Heldinが、ERCは2007年の始めに立ち上がることで、また、ERCの初年度の予算は3億ユーロであるが、2013年には17億ユーロになると予想していると述べました。また、スウェーデンはERCの予算の2%を負担することになっているが、これまでのスウェーデン国内の研究予算に純増される形で手当てされることを望んでいる旨発言がありました。ERCの研究資金は有力大学の研究者に流れ、有力大学をさらに強くするだけで、EUの新たな加盟国はそのことを危惧しているのではないかと指摘がありましたが、ERCの創設の仕事に携わったProf. Bromanは、ERCは新たなEUの加盟国からも資金を得ていること、ERCのグラントはすぐれた研究者が母国で活動するために役立つ旨指摘しました。

EU 議会の議員である Lena EK は、欧州フレームワークプログラムの作成に携わった経験から、例えばドイツのマックスプランク研究所は、同フレームワークや ERC に自身の考えが反映されるよう、EU 議会を多かれ少なかれ訪問していたが、スウェーデンの大学関係者の姿は見かけなかった旨指摘したところ、スウェーデンは EU に対する影響力を及ぼすという点で怠けていると同調する意見がありました。また、Lena EK は、スウェーデンの研究者から EU の研究資金を使用した経験などを通じての指摘が少ないことから、研究者が 1 年に 1 回集まって、議論する場の必要性を訴えました。(大月)

(参考) ヨーロッパリサーチカウンスル (ERC) について

- ・ 研究者で構成され、欧州委員会は ERC の自律性を尊重する
- ・ すべての研究分野をカバーして、選考はピアレビューによって行われる。
- ・ 研究資金負担割合と当該国の研究者が受け取るグラントの総額は必ずしも相関関係がない。
- ・ 研究者は研究室を移動するときにグラントを持っていけるなど、グラントには柔軟性がある。
- ・ 2007 年のグラントは博士号を取得して 8 年以内の若手研究者のみを対象にする。

なお、ERC の詳細につきましては以下のサイトをご参照下さい。

ERC ウェブサイト : http://erc.europa.eu/index_en.cfm

●シャルマーシュ工科大学の学生が京都大学原子炉実験所で実験研究

日本での大学における原子力教育については、近年専門職大学の創設など新たな動きが見られるものの、世界全体の流れと同様に試験研究用原子炉が減少傾向にあり、一部には学生の教育研究への悪影響も指摘されております。

一方、現在スウェーデンでは学生は海外実習をしていると JSPS Alumni Club in Sweden のメンバーであるシャルマーシュ工科大学原子力工学の Prof. Pazzit から報告がありましたので、日瑞交流の一例としてお伝えします。

スウェーデンでは、Studsvik 研究所の R2-0 炉及び R2 炉が学生の実験研究に大きな役割を果たしていましたが、2005 年 8 月に恒久的な措置として閉鎖され、スウェーデンの大学の学生は海外で、例えば、王立工科大学の学生はベルギーで、ウプサラ大学の学生はフィンランドで原子力に係る実習実習を行ったとのことです。

シャルマーシュ工科大学の原子力工学科の学生は、Prof. Pazzit が JSPS の外国人招聘事業以来の京都大学原子炉実験所長との交流を活用して、日本の大学が持つ原子力施設としては最大規模の同実験所で本年 8 月に訪日して実験研究を行いました。

京都大学臨海集合体実験装置 (KUCA) 等の技術レベルは傑出していることに加えて、実験所の職員は、地理的に近い韓国の学生を始め外国の学生の受入れにも非常に慣れており、1 週間の実習は大変実りあるものになったとのことで、来年も同実験所で実験研究を行うことを計画しているそうです。(大月)

●ストックホルム・ウプサラの主要大学が新たなウェブサイトを立て上げ

ストックホルムとウプサラにある大学のネットワーク SUUN (Stockholm's and Uppsala's university network) が、ヨーロッパの最もすぐれた大学連合を目指して、外部との新しい関係を構築することも目的として、新たなウェブサイトを立て上げました。

SUUN はこれまでも非公式な情報チャンネルとしてありましたが、さらにその連携を強化し、

外部との連携に向けてより活動的に、財政から研究まですべてのことについて取り扱うこととしています。

SUUN はこの地域の主要 6 大学、王立工科大学、ストックホルム大学、カロリンスカ研究所、ストックホルム商科大学、ウプサラ大学、スウェーデン農業大学から構成され、その中核は学長同士の緊密な連携によって生み出されます。その目標は共同で地域の力を売り込み、研究政策課題に取組み、協力によって得た成果をさらに発展させることです。(大月)

なお、詳細につきましては以下のウェブサイトをご参照ください。

SUUN に関するウェブサイト : <http://www.uu.se/suun>

4. 北欧の学術機関の紹介

The Swedish Research Council (Vetenskapsrådet)



(1) 沿革と目的、組織について

The Swedish Research Council (Vetenskapsrådet, スウェーデン研究会議。以下 VR) は、教育研究省所轄の独立行政庁で、2001 年 1 月に、人文社会科学・医学・自然科学・工学リサーチカウンシル、研究計画調整カウンシルの 5 つの機関が統合されて設立されました。VR は、スウェーデンにおける基礎研究のレベルを世界的なものに維持することをその任務としており、研究資金を助成し、研究革新を促進することを目的としています。

VR は最高意思決定期間である理事会を有し、人文・社会科学カウンシル、医学カウンシル、自然科学・工学カウンシルという 3 つのカウンシルと、教育科学委員会、研究基盤委員会という 2 つの委員会から成り立っています。事務局長が組織管理の最高責任者であり、それぞれの 5 組織には議長がおかれています。VR の組織の特色は、理事会とカウンシルの大半のメンバーが、大学等の研究者から構成される選挙委員会の選挙によって選ばれることです。

・ 理事会

議長を含み 13 名から構成され、8 名は選挙によって選出、5 名は政府から任命。また、理事の半数以上は科学的な側面により優れた大学等の研究者を選定。VR の包括的戦略、政策の決定権を有する。

・ カウンシル/ 委員会

それぞれのカウンシルは議長を含む 11 名の委員と 10 名の補欠委員で構成され、14 名は選挙によって選出、7 名は政府から任命。議長は最大 6 年非常勤として雇用され、委員は 3 年任期で交代。

委員会のメンバーは、理事会より任命され、それぞれの研究領域内で最高水準の研究を促進・助成し、研究資金の分配や研究の質・重要性等の評価、予算や年間報告の作成等を行う。各カウンシルは分権的な体制をとっており、VR 全体の配分額のうち、およそ 80%は個別のカウンシルが独自の裁量によって配分を行っている。

(2) 具体的活動とその機能について

VR は主に「研究支援」、「研究政策の形成」、「研究情報の提供」という 3 つの柱を軸に活動しています。

① 研究支援について

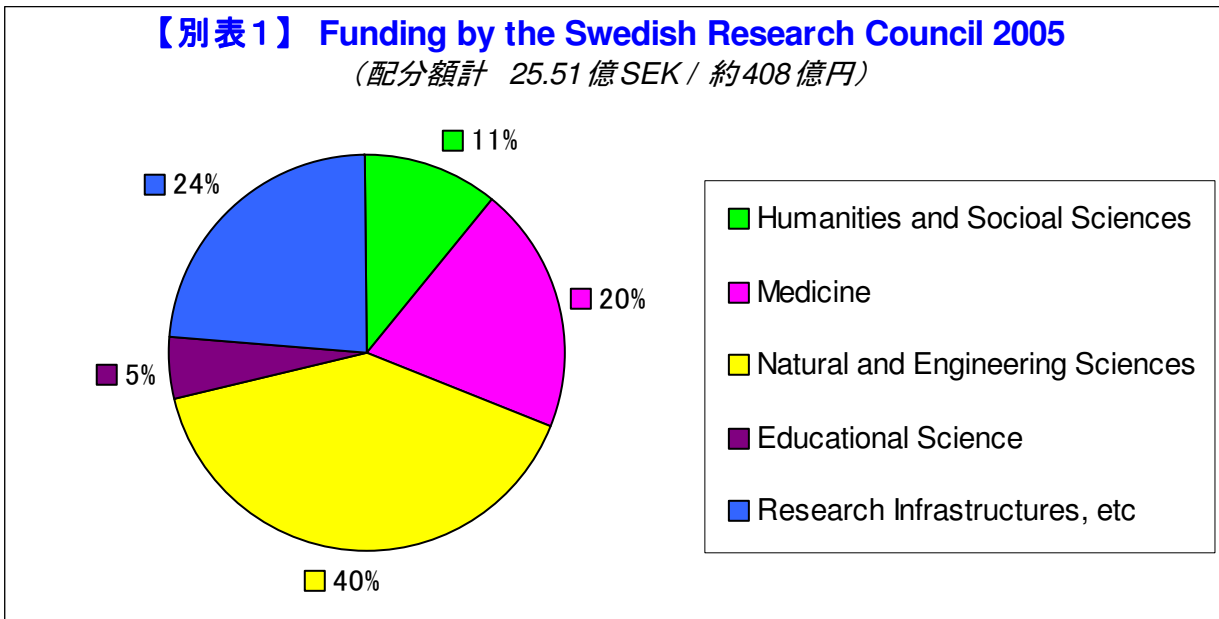
VR は年間約 25.5 億 SEK (約 408 億円) の予算を持っており、スウェーデンの基礎研究における最大の研究助成団体となっています。研究資金は、プロジェクト補助金、雇用補助金、

フェローシップ(博士課程履修者と European University Institute 博士課程生)、インフラ整備、交通費と会議費、出版と定期刊行物の6つに分類されます。

② 各種研究課題に関する申請～審査～決定方法

研究課題は、人文・社会科学及び自然科学の全分野を対象とし、提出された申請書は分野ごとに分類され、およそ 500 人に及ぶスウェーデンや外国の研究者で構成された審査委員団が、1) 透明性・公開性の確保、2) 研究者同士によるピア・レビュー、3) 利害関係排除のための厳密なルール、4) 研究の科学的な質に応じた 5 段階評価、などを原則にした審査システムに基づき評価を行い、優先順位が付けられます。優先順位がつけられた申請書は、カウンスル又は委員会の採択部門に提出され、最終的な採択課題が決定されます。採択結果については本人に対し通知がなされるとともに、VR のウェブサイトで外部公表されます。

なお、2005 年の研究助成金における科学分野別の配分状況は、別表 1 のとおりです。



③ Linnaeus Grants (リンネ助成金) の創設

より高度な研究を組織的規模で支援し、卓越した研究拠点を創設することを目的に、2005 年に Linnaeus Grants (リンネ助成金) という事業が創設されました。この事業への申請は、研究者個人単位ではなく、大学など研究機関単位が原則となっています。初年度はおよそ 100 件の申請に対し、20 件の研究計画が採択されました(具体的プログラムについては別表 2 のとおり)。採択された研究機関には各年度約 140 万クローナ(約 2300 万円)の助成金が 10 年間配分される予定です。なお、次回の申請時期は 2007 年を予定しています。

【別表 2】 Linnaeus Grants 採択課題 (2006 年)

Research Content	Core Institutions
Engineered Quantum Systems	Chalmers University of Technology
Learning, Interaction, and Mediated Communication in Contemporary Society (LIMS)	Göteborg University

A Strategic ResearchCenter in Developmental Biology for Regenerative Medicine (DBRM)	Karolinska Institutet
STARGET—A Cancer Research Network for Studies of the Diagnostic, Prognostic, and Therapeutic Potential of Mesenchymal Cells of the Tumor Stroma	Karolinska Institutet
Linköping Linnaeus Initiative for Novel Functional Materials (LiLi-NFM)	Linköping University
Center for Economic Demography (CED)	Lund University
Dissection of the Genetic and Metabolic Complexity of Diabetes and its Complications	Lund University
Exploring and Controlling the States of Matter with Light—Multidisciplinary Laser Spectroscopy within the Lund Laser Center	Lund University
Hemato-Linnaeus, A Joint Initiative to Understand Healthy and Morbid Blood Generation	Lund University
Innovation, Entrepreneurship and Knowledge Creation: Dynamics in Globalizing Learning Economies - Linnaeus Research at LUCIE	Lund University
Nanoscience and Quantum Engineering	Lund University
Organizing Molecular Matter	Lund University
The Neuronanoscience Research Center—A Cross-Disciplinary Research and Technological Platform Combining Neuroscience, Nano and Microtechnology and Biotechnology	Lund University
A blueprint for future flow research	Royal Institute of Technology (KTH)
ACCESS—Autonomic Complex Communication nEtworks, Signals, and Systems	Royal Institute of Technology (KTH)
Integration or segregation? Immigrants and the labor market	Stockholm University
Climate evolution, variability and sensitivity	Stockholm University
Insect Chemical Ecology, Ethology, and Evolution, ICE3	Swedish University of Agricultural Sciences (SLU)
Aging and Living Conditions	Umeå University
Strategic funding of UppsalaRNAResearchCenter (URRC)	Uppsala University

④ 研究政策の形成について

VR は研究政策に関して政府に助言する役割も担っています。スウェーデン国内の研究や研究政策を分析、評価を行い、その結果が政策決定に反映されます。また VR は政府の研究委員会会議に出席し、現在の研究動向について情報を提供することもあります。最近ではクローン研究に関する指針なども扱っています。

⑤ 研究情報の提供について

VR では研究者及び一般国民に対し、スウェーデン国内で行われている研究やその成果について定期的に情報を提供しています。例えば大学や他の研究助成団体と協力して、小学生や中学生を対象としたイベントや国際的な科学展を開催しています。また VR は他の研究助成団体と協力して、研究プロジェクトや科学的論評、研究ニュースなどを提供するホームページ；「forskning.se」（<http://www.forskning.se/servlet/StartDoc>）を開設しています。

（３）国際交流・連携の状況

VR は北欧諸国における各学術機関のほか、他のヨーロッパ諸国及び EU や UNESCO、ESF（欧州科学財団）などと連携し、国際的な共同研究プログラムについても協力を行っています。また欧州以外では韓国、台湾などと二国間交流に関する覚書を締結しています。

（４）今後の活動計画について

VR は 2005 年～2008 年の活動計画において、今後の方向性を以下のように言及しています。

・研究者への就業機会の支援

研究者の就業問題を解決するため、若い研究者を支援する助成システムを展開。ポスドク・任期制ポスドク研究助手への補助金、特別能力のある研究者が研究キャリアを継続できるような補助金を増大させる。

・特定分野を支援

今までは専門家によってジェンダー研究、IT、生物学的多様性に優先順位が与えられてきたが、今後は基礎工学、気候研究、分子生命現象等の分野に特別な支援対策が必要。

・研究基盤の強化

2005 年に研究基盤委員会を増設。主な目的はスウェーデン研究者のための高質な研究基盤を確保すること。委員会は高価な科学的機材、大規模研究設備、広大なデータベース構築のために資金を分配する役割を担う。

・国内外の助成団体との協力

スウェーデン国内では FAS(スウェーデン労働生活・社会リサーチカウンスル)、FORMAS（スウェーデン環境・農学・空間計画リサーチカウンスル）、VINNOVA（スウェーデンイノベーションシステム開発庁）との協力を計画。また国外との協力関係では European Heads of Research Councils (EUROHORCs)や ESF との連携を強化するとともに、ヨーロッパ諸外国における研究助成団体との協力関係拡大を模索。

今年で統合・設立から 5 年が経過した VR ですが、時代の流れに合わせ柔軟な活動を展開しており、スウェーデンにおける中核的な研究助成団体として順調に機能している様子が伺えます。また、今後の活動計画を外部にも明確に公表するなど、積極的に国内外の助成団体との連携強化する姿勢なども見て取れます。

JSPS をはじめ、日本の研究助成機関と VR との間に、現時点で具体的な協定等は締結されていませんが、本センターとしても、共催シンポジウムの開催や、研究助成プログラムに関する意見交換などを通して、今後さらに積極的な協力関係を築いていく必要があると感じています。

（石沢）

（参考） 1. The Swedish Research Council (Vetenskapsrådet)

ウェブサイト：<http://www.vr.se/>

2. The Swedish Council Review of the year 2005-2006

5. JSPS Alumni Club in Sweden 会員インタビュー

名前 : Dr. Enrico Savazzi

所属 : スウェーデン自然史博物館 古生物学部門 客員研究員

化石記録はこれから数億年先に生物が進化を遂げるかもしれないように、現生生物が見せる以上に古生物の生態を推定する手がかりを与えてくれます。一方、現生生物の研究をすることによって、化石では残らないであろう進化様式を観察することができます。ただ、現生生物だけでは長い進化の歴史における最後の一瞬をみているに過ぎません。現生生物のタイムスパンはその進化の過程を観察するには短すぎます。



9月19日14時より JSPS Stockholm オフィスにて、スウェーデン自然史博物館古生物学部門客員研究員の Enrico Savazzi 氏をインタビューしました。

同氏は2000年に外国人招へい研究者（短期）事業で東京大学の棚部一成先生受入れのもと訪日されました。その後も2002、2003年に STINT(Swedish Foundation for International Cooperation in Research and Higher Education) のフェローシップにより、会議のスピーカーとして訪日されるなど、日本と継続的に交流を図っておられます。

Savazzi 氏は機能形態学、生物とその組織形成の関係について研究されています。同氏は複数の研究プロジェクトをお持ちでその一つは日本で始められました。同氏にとっては初めての試みで、前カンブリア紀から初期カンブリア紀—紀元前10億年から50億年の時代の軟体動物類を対象とされています。以前は貝に焦点を当てて研究されておりましたが、京都大学（小野照文先生）の研究室で研究されていた時に、恐竜の研究をしているオーストラリア人研究者の影響を受け、現在の研究を始められました。

日本との研究交流を始めた折のキーパーソンは Prof. Richard A. Reymont（ウプサラ大学名誉教授、Savazzi 氏の博士論文スーパーバイザー）です。Prof. Reymont は日本と研究交流をされていた関係で、日本への関心をもたれたということです。

Savazzi 氏はウプサラ大学で1年間ポスドクフェローとしてのチャンスを得、その後アメリカへのポスドクフェローの機会を得ましたが、諸事情でアメリカ行きを辞退され、ご自身と同じ領域の研究者を探されました。森田利仁研究員（千葉県立中央博物館教育普及課）が、日本との最初のコンタクトパーソンでした。その後、佐々木猛智先生（東京大学総合研究博物館）、生方貴男先生（静岡大学理学部）らとの交流も始められました。

日本における古生物学の現状についてお話を伺いしたところ、どの分野にもあることかもしれないが、古生物学には流行や特に注目を浴びている国があり、現在のそれは日本だということでした。日本では比較的新しい理論が用いられており、過去5年間多くの学生が興味深い研究をしているとのことでした。また、日本は海にアクセスしやすく海洋研究が容易なためとても研究に適している場所だということでした。スカンジナビア諸国では、同氏以外に機能形態学の研究している方はいないということで、同氏にとっては、日本の研究者との交流が意義深いものであるよう

に感じられました。スウェーデンでは古生物学は時流に乗っていない、記述的科学であるとのこと。日本にももちろん記述的手法で研究している研究者もいますが、総合的にみて日本の古生物学者のレベルは高いようです。

最後に、**JSPS** のフェローシップ事業に関して、**JSPS** のフェローシップは一度採択されると、



3年は申請できないということになっており、これでは共同研究の継続性の点で難があるので、3年という制限をなくし、フォローアップ・フェローシップというような形で、短い期間でも再度渡日できるようにすれば効果的なのではないかとコメントをいただきました。

Savazzi 氏は、京都にいらっしゃる時も、鴨川や高野川などで研究用の写真を撮影されていたそうですが、日本の野鳥は人間慣れしていて、近づいて撮影するのが容易だということでした。

また、滞在中から日本語に関心をもたれ、日本語学校に通われた経験があるそうです。スウェーデンに戻られてからも大学の日本語コースを受講されております。ご家族も日本に関心をもってらっしゃるようで、非常に親日的な雰囲気が伺えました。

日本へ関心のあるスウェーデン研究者へのアドバイスや日本人研究者の受入れなどの活動は積極的に引き受けてくださるとの頼もしいお言葉を頂戴し、和やかな雰囲気でのインタビューを終了しました。ありがとうございました。(中谷)

名前：Prof. Mikael Lindgren

所属：ノルウェー科学技術大学 物理学教授

9月7日(木) 14時よりノルウェー科学技術大学にて、同大学の物理学の教授をしている **Prof. Mikael Lindgren** にインタビューをしました。



同氏は **Alumni club in Sweden** 72名(2006年9月現在)の会員のうち、唯一スウェーデン国外の大学で教授を勤められ、現在はレーザー分光學及び材料工学等その応用について研究をされております。日本には、博士課程のときの研究テーマであった放射線化学の関係でお知りになられた北海道大学の小笠原先生を受入れ研究者として、**1988**年の博士号取得後、ポスドクとして**1990**年初頭に来日され、同大学で**1**年間研究されたことを皮切りに、その後**10**年間は、埼玉の理化学研究所、広島大学などでの**2**年間の日本滞在を含め、毎年訪問されたそうです。

同氏は、日本でのポスドクターを経験することを選んだ理由として、日本の同分野の研究者と知り合いになったことはもちろん、誰もが米国、他のヨーロッパ諸国を選ぶ中で、日本を選び新たな研究テーマに挑戦しようと思ったことを上げられました。

日本、スウェーデン及びノルウェーの研究環境の差異について尋ねたところ、ノルウェーには、理化学研究所やスウェーデン・シスタのフォトニクスセンターのような大きな研究所はなく、研究グループの規模は小さいとのことでした。しかし、研究には大型施設が必要である一方で、研究の専門化が進んでおり、ノルウェーにおいても、外部資金を獲得したり、国際共同研究に参加するためには、ヨーロッパレベルで競争する必要があるため、少しずつ変わって来ているとのこ

とでした。Prof. Lindgren は、所属するグループが小さいことを逆に利用して、常日頃訪問しているウメオ大学、かつて勤務したリンショーピン大学を始めとして、ルンド大学以外のスウェーデンの主要な大学とは共同研究等を進めているとのことでした（ルンド大学は、地理的にデンマークとのつながりが深く、関わりがないとのことでした。）。

日本の研究環境について全く問題なく、フェローシッププログラムのサポートも十分だったと回答されたので、スウェーデンの研究者の中には、日本では研究室で寝泊りをするポストドクが多いことに驚かれる方がいるが違和感はなかったかと尋ねたところ、Prof. Lindgren 自身、現在も睡眠時間を削って研究を続けているとのことでした。

日本とノルウェーの協力関係を進めるために、どのような分野が考えられるか尋ねたところ、ノルウェーは、太陽電池版などを含めたエネルギー工学や海中の石油の発見する方法などの海面下での工学技術が特に優れているとのことでした。

また、JSPS のプログラムにより平成 17 年度のスウェーデンから日本への研究者交流は 48 名であったのに対し、ノルウェーからは 2 名であったことを述べ、日本とノルウェーの協力関係を促進させるための意見を伺ったところ、良いプログラムがあるならば宣伝活動に加えて、関連する研究者同士が常日頃コンタクトを取りつつ、特にポストドクの交流を充実させることにより、将来的に交流が促進されるのではないかとのことでした。

最後に、天皇皇后両陛下が 2005 年 5 月に同大学立ち寄られた大学の食堂等を案内していただきました。また、同窓会総会等への出席を求めたところ、時間がないので難しいとのことでしたが、今後とも連絡を取ることを約しました。（大月）



NTNU の食堂



研究室での Prof. Lindgren

編集後記

9 月までは例年以上の暖かい気候が続いていたストックホルムですが、最近では朝晩もかなり冷え込み、徐々に冬の匂いを感じられるようになってきました。スウェーデン北部では既に雪も降っており、ひと足先に長い冬が始まっている模様です。

夏の間、北欧の人々に多くの喜びを与えてくれた太陽も徐々にきまぐれな振る舞いを見せ始め、なかなか顔を出してくれなくなりました。また夜の時間も日を追うごとに長くなっており、ここが高緯度地方であることをしみじみ感じます。



しかし、秋は味覚の季節でもあります。ストックホルムで8月から10月の週末にかけて行われるファーマーズマーケットでは、夏の太陽の恵みをじっくり受けて育った野菜たちや北欧特産のリンゴンベリー（こけもも）、そしてカンタレリと呼ばれる黄色いキノコなど、産地直送のごちそうがずらりと並び、人々の目とお腹を喜ばせています。

当センターでは、今月末に **JSPS Alumni Club in Sweden** 主催のセミナー開催を予定するなど、今後も様々なイベントを行っていく予定ですが、こうした各種シンポジウムの開催やフェローシップ事業、そして大学等研究機関の国際戦略に対するサポートなどを通して、この秋の味覚たちのように日瑞間の学術交流がより素晴らしい収穫となるよう、意義のある活動を展開していきたいと思います。（石沢）

Edit

監 修: 岡崎 恒子(ストックホルム研究連絡センター長 E-mail:t-okazaki@jsps-sto.com)

編 集 長: 大月 光康(ストックホルム研究連絡センター副センター長 E-mail:m-otsuki@jsps-sto.com)

編集担当: 石沢 友紀(ストックホルム研究連絡センター国際協力員 E-mail :gakushin2@jsps-sto.com)

執 筆: 大月 光康、石沢 友紀、中谷 幸代

日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

JSPS Stockholm office -Retzius väg3, S-171-77 Stockholm, Sweden-

TEL +46 (0)8 5088 4561 FAX +46 (0)8 31 38 86 <http://www.jsps-sto.com>

